

編集後記

16巻3号のあとがきを書く時期となった。今回のテーマは“リハビリテーション医学関連専門職種の教育”である。昭和30年代に諸先達が大変努力をされて理学療法士、作業療法士が誕生したことは、日本のリハビリテーション医学にとっても画期的なことであった。しかしその後は遅々たる歩みで、仮称“言語療法士”はまだまだの様であるしMSWにしても職業カウンセラーもある様でその実態ははっきりしない。その中で義肢装具士が国家資格を得たことは兎に角よろこばしい事であった。

今回の特集の最初は日本のPT、OTの生みの親の一人である五味氏によるもので期待どおり大変興味深い。昭和47年のカリキュラム改正については後の松村、矢谷両氏もそれについて述べている。元に戻り五味氏は実現した3年制短大に加え4年制の大学についても触れている。これは私の“私見”であるが、現在の医学におけるPTやOTに対する医療側の期待度を考えると、すべてが短期大学である必要は無い。さらに全ての短期大学が4年制の大学になってゆく必要も無いことは確かである。私はある各種学校の養成校に関係しているが、事教育や卒業生の質に関しては何処の短期大学よりも勝るとも劣ることは無いと思っている。

松村氏は理学療法士養成校のカリキュラム、矢谷氏は作業療法士養成校のカリキュラムについて夫々述べている。PT、OTが生まれてから20年が経ち、量より質の時代に変ってきた。そこで養成校の教員についてはすでに改められ、今度はカリキュラムを改めることになった。実態は定められた時間数どおりに授業をしているところは無く、時期的には改定の作業を行うには適切であったし、両協会ですでに自分達の案を作り始めていたことは賞賛されてよい。

田沢氏は義肢装具士の卒前教育を国内と外国について比較した。興味ある内容で義肢装具士の頭の中を覗いたように思えた。これも20年経った時には変っていく事であろう。

土肥氏はナースの卒前教育については長い経験を持ち、リハビリテーション医学の教科書も出版した。看護がしっかりしていなければ、如何にPTやOTが頑張ったところでリハビリテーション医療は適切に実行されない。50校のアンケート結果について述べているがこれも面白かった。

この号はさらに3編の研究と報告、2編の講座、学会見聞録、さらに身近な問題を取り上げた廣谷氏の巻頭言と盛り沢山となり教育にそれほど興味を持たない方にも面白い所があるはずである。(明石 謙)

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文 一郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江 口 壽 榮 夫
小 川 孟
荻 川 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

総合リハビリテーション (第16巻 第3号)

1988年3月10日発行(毎月1回10日発行)

1部定価 1,750円(配送料60円)

(年ぎめ予約購読料 19,560円)
(送料弊社負担)

発行 株式会社 医学書院

代表者 金原 優

〒113-91 東京都文京区本郷5-24-3

電話 受付台 (03) 817-5600

本誌編集室直通 (03) 817-5704

(担当: 山田・細田)

販売部直通 (03) 817-5659・5660

ファクシミリ (03) 815-7802

振替口座 東京 7-96693番

印刷所 三報社印刷(株): 電話 (03) 637-0005

広告申込所 (株)東広社: 電話 (03) 409-8803

Published by IGAKU-SHOIN Ltd. 5-24-3 Hongo, Bunkyo-ku Tokyo © 1988, Printed in Japan.
本誌の内容を無断で複写・複製・転載すると、著作権・出版権の侵害となることがありますので御注意下さい。